

望岳山荘



中嶋 嶺雄

秋田から日本を眺めると、信州から展望するのとは違った構図が見えてくる。「北東北」というコンセプトは、これからの地方の時代に一つの新鮮な問題を提起するのではないかと

思っが、西行法師にしても、松尾芭蕉にしても、「奥州」といふべき「北東北」に憧れて旅に出たのであった。

そして近世も江戸時代後期になると、菅江真澄の存在が大きククローズアップされる。彼は「北東北」中心の旅日記と図絵(色づきのスケッチ)、そして晩年には二十八年間も留まった秋田に膨大かつ詳細な地誌を残し、秋田で没した漂泊の旅人であった。

秋田と信州の間—菅江真澄を介して

その菅江真澄は、よく知られてるように信州とも深いゆかりをもっている。

最近では真澄が一年以上にわたって逗留し、地元の人々に少なからぬ影響を与えたという塩尻・本洗馬の釜井庵のことや、松本平の里山辺、入山辺、湯ノ原などを巡った足跡などが『市民タイムス』でもしばしば

報じられている。もとより秋田は、真澄が生涯の大半を過ごした地だけに、残された資料や絵図なども多く、いたるところに真澄の影があつて、真澄研究も盛んである。国際教養大学のトップ諮問会議のメンバーで秋田を代表する

経済人の辻兵吉氏は、真澄の代表的な図絵を数多く所蔵されており、また所持した全作品を真澄自身が寄贈した秋田藩校・明徳館にちなんだ明徳館高校の建物のなかには国際教養大学のサテライトがある、といった次第である。

いた頃は、まだ菅江真澄を名乗ってはいなかった。本名の白井英二に近い白井秀雄がその名で、菅江真澄を名乗ったのは秋田にいた五十歳代後半になってからである。真澄は宝曆四(一七五四)年に三河の吉田宿(現在の豊橋市高須)に生

まれたとされているが、豊橋には白井姓が多く、実は豊橋出身の私の妻の母も白井家の出である。その真澄は「いでは みちの奥 見にまからん」として三十歳で旅に立ったが、最初の日記「伊那の中路」にあるように、「みすずかる科野の

しら波にうちとられたればすべなし」と述べて、自らの過去と決別し、そして故郷に戻ることもついになかった。秋田へは、芭蕉が「象瀧の雨や西施がぬぶの花」と詠んだ馬海山麓の象瀧から入り、雪深い湯沢や横手を

経て久保田(秋田の旧名)、男鹿を経て国際教養名、さらには山間集落の伝統芸能「番菜」への愛着、旅芸人や遊女らへの眼差しなどに示されるように、柳田の民俗学とは大きく異なつた地平を向いていたようにも思われる。

信州と縁の深い民俗学の開祖・柳田国男も菅江真澄を高く評価し、広く紹介しているが、真澄の姿勢は、前回のこの欄でも触れた「またぎ」の文化や「北東北」各地に残るアイヌ語地名、さらには山間集落の伝統芸能「番菜」への愛着、旅芸人や遊女らへの眼差しなどに示されるように、柳田の民俗学とは大きく異なつた地平を向いていたようにも思われる。

(国際教養大学理事長・学長 長川松本市出身)